



愛に満ちた三姉妹と幸運な染物師 : 一枚の風俗画 (後半)

フォン・アルニム, アヒム
假谷, 祥子(訳)

(Citation)

DA, 13:89-110

(Issue Date)

2018

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCOI)

<https://doi.org/10.24546/81011282>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/81011282>



愛に満ちた三姉妹と幸運な染物師

一枚の風俗画

(後半)¹

アヒム・フォン・アルニム

假谷祥子訳

ゴルノウが自室に戻ると、若旦那シュナブファンは「正直者の手工業者は、自分に関係あることだとは思っていないようだが」とそれとなく話し始めた。「説教師は、女性というもののおかげでとても豊かなのだ。彼の娘たちは評判がよく、しかも美人だというから、彼女たちと結婚する者は幸せをつかむんだろなあ。」ゴルノウは彼が立ち去るのが待ち切れなかった。去ってしまえば、ようやく彼のレーンヒェンに全てを詳しく伝える手紙を書けるのだから。この書くという仕事を、ゴルノウは今までずっと嫌って避けてきた。というのも、彼は羽ペンの扱い方を特に知っているというのでもなく、また、書いている途中で文を忘れてしまうので、大体の場合、実際に書こうと思っていたこととは全く違うことを書いてしまうからであった。しかしながら、彼の愛はあらゆる障害を克服した。朝五時には二枚の便箋に、まるで家系図でも書くように、こちらでは言葉を挿入しあちらでは言葉を削除しながら、上下に曲がりくねった行でたっぷりの愛情と物語をしたためた。彼は手紙にしみを付けずに封をすることもできなかった。ところがその段になって、彼のレーンヒェンが手紙を確実に受け取るためには、封筒の表紙をどう書くべきなのだろうか、という困惑が襲い掛かってきた。彼は徹底的に考えぬいた。十分に納得して、彼の年老いた父に若旦那シュナブファンから借り受けた金貨を数枚同封し、彼の住む広々とした小農場があるエアトマンスヴァルデへ送ったときには八時になっていた。そうこうして、手紙をめぐる全ての仕事はついに十時に終わった。ゴルノウは今まで感じたことがないくらい上気して疲れ果てていたが、若旦那シュナブファンの布の在庫を吟味したところ、大量の白い布の蓄えを発見した。それは、若旦那の父が軍隊に納入するのに失敗して買い取ったものであった。息子は仕入れ値として六万グルデンを提示した。ゴルノウは慣れない書き物のせいですっかり疲れ果てていたもので、深く考えぬまま、その値に対して三万グルデンだと答えた。部分的に黄色く変色しているこの布をすぐに処分できるとは夢にも思っていなかった若旦那シュナブファンは、さ

¹ 本稿は下記テキストの後半部の翻訳である。前半部の拙訳は『DA』（2017）第12号、54-72頁に既出。

Ludwig Achim von Arnim: *Isabella von Aegypten, Kaiser Karl des Fünften erste Jugendliebe. Eine Erzählung. Melück Maria Blanbille, die Hausprophetin aus Arabien. Eine Anekdote. Die drei liebevollen Schwestern und der glückliche Färber. Ein Sittengemälde. Angelika, die Genueserin, und Cosmus, der Seilspringer. Eine Novelle.* Berlin: Realschulbuchhandlung, 1812, S. 225-304.
訳出に当たっては下記の版も参照した。

Achim von Arnim: *Die drei liebevollen Schwestern und der glückliche Färber.* In: ders.: *Werke in sechs Bänden.* Bd. 3: *Sämtliche Erzählungen 1802-1817.* Hrsg. von Renate Moering. Frankfurt/M: Deutscher Klassiker Verlag, 1990, S. 778-833.

らに自身の秘密の借金の支払いに金を必要としていたので、ゴルノウの言い値で手を打った。全ては適切に行われた。くじは引き換えられ、信用状と布代を差し引いた現金が渡された。布は説教師の家へ運ばれた。そこでは、ズザンナが愛する人のために床を調べて花で飾り付け、さらに必要な部屋の調度をあつらえていた。

仕事への情熱に燃えていた染物師は、その日のうちにさらに黒染め用の染料と必要な器具類を買ひ、次の週には左官たちの仕事さえも手伝うようになった。そして一週間後には、彼の漂白されたように白かった手はまたもや黒く染まってしまう、ズザンナはこの嫌な仕事に対してかなり不機嫌であった。だが、ゴルノウは自分の生業をまるで天国の仕事かのように話しており、また次のように歌って聞かせていたので、彼女はその思いを彼に気づかせてはならなかったのである。

この世界が色を保とうとしなかったとき、
主はこの世界をノアの洪水に浸し、
それから世界を色とりどりの光で照らし、
色は新たな結びつきを成した。
染物師は真の仲介者
神と世界をわざによって一つにする者。

ところで、ゴルノウの倦むことない仕事と彼が雇う労働者の増加という現実には、ズザンナが彼に親密に接しようとする機会をことごとく邪魔していた。一方でゴルノウは些細な好意の表明をさらに解釈するには教養ある階級についてあまりにも知らなさすぎたので、二人の仲は初めて会った日と比べ、二ヶ月経った後でも何も進展していなかった。

そうこうするうちに、彼は黒以外の色の染め方をきちんとは教えてもらっていなかったもので、布のほとんどを黒く染めてしまった。ある日曜日の朝、祖母と母にズザンナの恋心をそっと教えられた説教師がついにゴルノウの部屋へやってきた。彼はゴルノウの勤勉さを褒めてから、急激に成長したせいで健康を害した末娘シャルロッテを、療養のため田舎の寄宿学校へやって本当に寂しいのだ、というような話をした。それに続いて、家政を良きクリスチャンの妻によって直ちに落ち着かせようとするのではないのかね、そうすれば労働者を自分で養えるだろうし、日常的な支出の多くを省くことができるだろうに、と尋ねた。ゴルノウは喜びのあまり泣き出し、「その考えは唯一自分を苦しめるものなのです。」と答えた。説教師は、「あなたはとても礼儀正しく、その勤勉さは賞賛に値するものなのだから、きっと多くの女性があなたの手を取るでしょう。」と保証した。そしてまさに適切な説教をしようとしたとき、ゴルノウが彼の首に抱きついてこう言ったのである。「あなたの愛らしい娘、ズザンナを見てください！」—「おお喜ばしや、」説教師は答えた。「あなたがもう選んでいたとは。」—「ええ、」ゴルノウは言った。「もう変えることはできません。ただ死のみが私を私のレーンヒェンから別つのです！」—「レーンヒェンとは？」説教師が尋ねた。

—「レーンヒェンはヘレナです。」ゴルノウは気まずそうに答えた。—「ヘレナはあの美男子パリスを誘惑した女だが、私の娘とこのヘレナに何の関係があるのかね？」—「彼女はズザンナに、まるで姉妹のように似ているのです。そして名字が同じなのです。レーンヒェン・ヒレ、もしくはヒレン、シュテッティンにいる私の花嫁はそう申します。」—説教師は天を仰ぎ、再び地を見つめると、聞こえるか聞こえないかの声で尋ねた。「彼女はどこで生まれたのですか、そのヘレナは。」—「それは神のみをご存知です。」ゴルノウは溜息をつきながら答えた。「そしてそれが私の大きな心痛の種なのです。なぜなら、島がぼつんと海に浮かんでいるように存在するということは、地上における非常に深い悲しみだからです。その出生のせいで、永遠の生への希望以外に、捨て子は何も持っていないのです。」—「神は全ての捨て子の父なのです。」説教師は感動しながら言った。「神は親に、捨てた子がさらされた過酷さに相当する罰を与えます。しかし神は子を育てあげるので。」—染物師はそこで、秘密厳守の約束で、彼のレーンヒェンの物語を語った。説教師は、終いにはますます落ち着きを失っていった。彼は何度も話そうとしたが、これ以外には何も言葉を続けることができなかった。「主は罪深いしもべに哀れみを抱いてくださる！」

ついに説教師は戸をびつちりと閉め、これから打ち明ける全てのことは決して口外しないとゴルノウに誓いを立てさせた。それから、彼をしかと見すえながら叫んだ。「私が世間に秘密にしようとしていたことは無駄だった！最後の審判まで消し去ろうと思っていたことを、私は自ら告白せねばなるまい！」—そして彼は、イエーナで勉強していたときの様子、いかに勤勉で、敬虔で、貧しかったか、語って聞かせた。そこでは、他の学生のところでは多くを稼いでいた下宿先の娘が、情愛と贈り物を携えて彼を追いかけまわしていた。彼は確かにその贈り物を受け取ったけれども、いつも軽蔑しつつ対応していた。すると、彼女が自分の恩知らずな態度をついに非難するに至り、それに対して邪悪な欲望、本物の感謝、沈痛な非難が奇妙に混ぜ合わさるなか、彼女に従ってしまった。彼はその後すぐに、この関係を永久に解消するため、この罪に追い立てられて別の家に引っ越した。しかし間もなく、その誘惑者から一通の脅迫状を受け取った。「私は祝福を感じています」—それは彼にとっての不運だった。彼女は、彼が自分たちの子供の父として届け出ないのなら、永久に、聖職者の身分、したがって彼が敬んできたこと、学んできたこと、そしてこれから自分を養うべきこと全てを諦めねばならない、と脅していたからである。この絶望のうちに、彼は、何人かの大学の知り合いを見つめる望みのあるオランダへ逃げる決意を抱いた。それゆえ、この女性にはこう返事を書いたのである。「あなたがこの手紙を受け取るころには、私はもう生きてはいないでしょう。私が子供のためにしてやれるのは、ハルツギローデにいる義姉のヒレンさんに宛てて、義姉がこのかわいそうな子供を気の毒に思うようになるように手紙を書くことだけです。」—「私はこう書いた後、」と説教師は幾分落ち着いて続けた。「ヘブライ語とギリシャ語の聖書、それからわずかな金をポケットに入れて、まるで背後にはソドムの街があるかのように、脇目もふらずイエーナから逃げ出しました。必要なものは、国の説教師のところで変えた名を使い、旅の途中の学生として乞うて手に入れました。ついにオランダ

に着き、真剣さと知識によって自薦し、名声のある裕福な家の出である、私の現在の愛する妻によって、この地で初めてのドイツ人説教師の地位へと引き立てられるまではずっと、あの誘惑的な魔女が私の死を信じないのではないか、私の行く末を言い当てるのではないか、という心配をしていました。イェーナを去ってからというもの、私は十分に給料が支払われる身分の裕福な暮らしをしつつも、過去の過ちが露見するかもしれない、と怯えていました。ああ！ 全くの思い込みによる恐怖の、嘆きに満ちた時よ！ 神と共に、私は悔い改め、祈り、神のブドウ畑での誠実な仕事によって自分を再び取り戻しました。しかし私は、人々がある人間の罰の対象とはならない生活に対する妬みを抱けば抱くほど、その人のひとつひとつの過ちを情け容赦なく罰する世間を恐れていました。愛するゴルノウよ、粗野な人というものは、仲間外れにされた者を自分より優れていると思わなかったときにこそ、本当に落ち着きを感じるのだし、その者を永遠に自分よりも下に見ようとするのです。—ああ、私のかわいそうな子、私はその子のために何もしてこなかった、ただ裕福な暮らしをしていただけ！ 幾度自分の恥を乗り越え、姉に全てを打ち明ける手紙を書こうとしたことでしょう。ですが、この誤った羞恥は克服するにはあまりにも大きかったです。もちろん、私は怠ってきたことの償いをしようと思います。あなたが決してうわべを装ったのではなく、敬虔な心からお述べになった、彼女へのあらゆる愛にかけて、私はあなたに誓います。私は今後、手紙であれ何であれ、あちらからの便りを持つことはいたしません。そうではなく、今から急いで帰って、私のかわいそうな子を、何の心配もいらないようにしてやりましょう。つまり、私の財産はあなたの意のままになるのです！」—

ゴルノウは考え込んだ。彼のレーンヒェンに再会することは、地上で最も喜ばしいことであるはずだった。しかしながら、染色のために布が全て準備され、染色釜がすでに煮え立ち始めているのだと考えるときには常であったように、彼の幻想は黒く塗りつぶされてしまった。彼は半分仕事に生きており、彼の自制心全てをもってしても仕事からは自由になれなかった。彼はまず初めに全ての布を染めねばならず、それから全ての荷をもって家に帰り、この布でどんなふうになるか考えるつもりだった。彼は、説教師のあらゆる懇願に対してこのように述べ、まったく折れなかった。説教師はあらゆる方法で話し合いを試みたが、とりわけゴルノウがレーンヒェンのため、初めての手紙にちょうどお金をいくらか同封したと聞いたので、それ以上は断念した。ただ、彼が今考え込んでいたのは、ゴルノウのことで娘のズザンナに何を知らせてやろうか、ということだった。そして最終的に、あらゆる要求を退けるための最善策とは、ゴルノウはシュテッティンですでに結婚している、と彼女に伝えることだと思いついた。説教師は、ゴルノウにズザンナの情熱について知らせて、ゴルノウが彼女の情熱を思いとどまらせるような方策をとることが必要であると思った。ゴルノウは、この件を嘘をつかずにやり過ごすことはどうせできまいと思っていたので、説教師の作戦に満足した。だが、愛すべきズザンナに対してひどく申し訳なくも思った。—

昼食をとろうとゴルノウが説教師の部屋に入ったときのこと、彼はみな顔に浮かぶ狼狽を読み取った。説教師は横から彼にささやいた。彼の娘は、ゴルノウを諦めねばならない

と知らされてあまりにも動揺したために、絶望しきって話し方は狂人のよう、誰の面会も許さない、というのである。ゴルノウは、普段のように食前の祈りで説教師の暗唱を復唱する代わりに、彼女のために祈った。彼は重苦しい心のままテーブルについた。会話や食欲はわずかだった。突然、ドアが跳ね開き、真っ黒な影が笑いながら部屋に入ってきた。皆は驚いた、説教師の妻と、祖母の驚き様はことさらであった。彼女達は、笑っている影が至る所に残していく黒い縞模様と水滴に気が付いた。おかげで、その黒い不気味な影の正体に思い当たった。彼らの不幸な娘ズザンナだ。「かわいそうな子、一体何をしたの」—母は叫んだ。「ああ、」娘は溜息をついた。「彼はね、私よりも、ご自分の色をもっと愛していっちゃるのよ、だから私はあの方に愛してもらえるように、自分を染めないわけにはいかなかったの。今なら私のことを気に入るでしょう、ゴルノウ、この誘惑者！」—ゴルノウは今や、工場にある自分の色のことを嘆き始めていた。その染料を彼女はきつとぶちまけたのであろう。ズザンナは笑った。彼が走りだすと、彼女はそのあとを追いかけた。それから説教師が続いたが、彼は遅すぎた。それから母、祖母、妹に女中が二人、廊下の床板に染料が染みこんでしまわないように、洗い桶を抱えてやってきた。それからの顛末はといえば、悪魔が人の姿を借りて現れたとしても、これほどまでの騒音をたてることはできなかっただろう。よりによってちょうどこのとき、説教師の日曜日用のかつらを受け取るために箱を持ってやって来ていたかつら職人が、階段のところでぼったりズザンナに出くわした。彼は驚きのあまり化石のように固まってしまって彼女を避けることができず、悪魔を見たと思ったとたん彼女に踏みしだかれ、真っ黒な彼女の両手で印をつけられてしまった。—ゴルノウは、ここで人の黒染めが起こった割には、染色場が全てかなり良好な状態にあることを確認すると、急いで彼女を閉じ込めた。そして、この家の人々を助けに行き、黒染めされたかつら職人を正気づかせ、今見たことは黙っているよう命令した。そして、黒く染まったこの美しい人を抱き上げ、冷たい水を張った桶に入れた。きれいに洗うのは彼女の家族にまかせ、そのあいだ自室で椅子にひざまずき、真っ黒な情熱から彼女の魂が浄化されるよう神に祈った。

翌日、ゴルノウはその話が残念ながら街中で見事としか言いようもなく話されているのを聞いた。そして、説教師の家族とともに、ズザンナはもうオランダにはいられないことを悟った。母親はかなり辛辣に、わが子が台無しになったのは、彼に対する彼女の友情がもたらした報酬ということなのかしらね、と非難した。ゴルノウは深く悲しんだ。というのも特に、ズザンナは熱にうかされた夜を越えたのち、その身の悲惨をはっきりと把握し、自分の狂気を呪いつつも、彼女の抱く愛だけは保ち続けている、と聞いたからである。彼は彼女にとって心から好ましかったのだが、彼にとってはレーンヒェンの方がもっと愛しかった。ズザンナとの結婚は、もしかするとこの家全体を落ち着かせ、レーンヒェンを本当の父親のもとへ連れてくることができるかもしれない。しかし、このことをゴルノウはあえて考えないようにしていた。ただ彼は、あらゆる熟考を遠ざけようと、倦むことなく染色業に励んだ。この染物の仕事がほとんど終わったときのこと、ベルリンから急使がやってきた。彼は国王フリードリヒ一世の死を報告し、くわえて豪華な葬儀のために膨大な量の美しい布を注文

した。しかし、ただ一人ゴルノウを除いては、だれにもそのような黒い布の在庫はなかった。というのも彼は、無意識の予感のうちに、シュナプファンの布の蓄え全てを黒く染めてしまっていたからである。その在庫を安く買い取ってやろうと仲買人たちがやってきたが、ゴルノウは刈り入れ時を見逃さない賢さを身に付けており、三台の荷車に布を積みこんで、最も近い道を自分でベルリンまで引いていく決心を固めたのである。

説教師は、自分が手放した娘への伝言をいくつもゴルノウに頼んだ。だが、ズザンナの要求はこれを上回った。彼女がゴルノウに落ち着いて説明したところによると、彼女はここアムステルダムで、以前のような発作にはもう見舞われないと確信しているにもかかわらず、もはや通りに姿を現すことさえできないという。だからまるで一番ひどい牢屋の中で生きているようで、彼の妻に仕えるため、彼と共に旅に出たいということだった。この申し出を母と祖母は支持したが、一方説教師は、自分の非嫡出の娘の存在を秘密にしておくため、断固拒否した。かわいそうなズザンナのこのささやかな願いは、つまるところ受け入れられなかったのである。彼女は黙り込み、落ち着いたかのように見えた。が、それは見せかけに過ぎなかった。

大きな荷車に、休みなく大急ぎで荷は積み込まれ、四日後には出発の用意がすべて整った。ゴルノウは本当に感動的な別れの挨拶をした。説教師は、彼にさらに色々耳打ちした。ズザンナは落ち着いているようだった。母と祖母は、別れの場のせいか控えめであった。彼は軽やかに出発した。自分の宝を引いて街道に出ると、パイプをくわえながら荷車の横について歩き、周りをよく見ることもしなかった。とそのとき、小さな包みを抱えた女性の影が一つ、突然歩道の片側から彼に近づいて来た。それはズザンナであった。彼女は一言も喋らず、自分の包みを荷台に置き、ゴルノウの隣をついて行った。彼には彼女を追い払うことはできなかったが、優しくすることもまたできなかった。彼は彼女を励ましもしなかったし、宿のどこに泊まっているのか気にかけることもなかった。しかし、彼女のために支払いをし、必要になりそうなものを密かに世話していた。ズザンナのほうは、同行を始めたころ、ゴルノウへのあらゆる接近を慎んでいるようだった。彼女がゴルノウと並ぶと、あたかもゴルノウが慈悲の心から街道で拾ってやったどこかの貧者のようであった。

詳しい説明はやめておくが、そうこうして彼らはベルリンへとやってきた。ゴルノウは非常に有利に商売をした。客の現金が不足している場合には、家や農園が安い値段で、彼に与えられた。オランダでは彼の財産など無意味であっただろうが、ここでは彼は国の裕福な人々の一員であった。そしてなんと、工場や商売を暴力的ともいえるほど活性化させている、新王フリードリヒ・ヴィルヘルムから煙草会に招待されたのである。ゴルノウが向向していくと、国王に気に入られ、オランダについて多くのことを語らねばならなかった。そして、大規模な染色業を営むためのあらゆる特権が与えられた。国王の経済的で力強い考え方を、ゴルノウは心から気に入った。彼自身が国王の口を借りて話しているのを聞いているのかと思うほどだった。

ゴルノウは、ベルリン中が自分の染めた布をまとった姿になる日を待ちわびていた。そし

て、この染物師としての大成功を経験し、葬列が終わると、百ハールツグルデンを手つかずのまま袋に入れてたずさえ、ズザンナと共にシュテッティンへと向かった。彼は道中で、ズザンナにレーンヒェンと彼女がどれだけ近い血縁関係にあるかを教えるのは自分の責任であると思った。彼は、そうすることでズザンナがレーネを見たときに感じる痛みを減ずることができると考えたのである。ズザンナは最初驚いたものの、このかわいそうな見捨てられた姉に会うことに対する優しい憧れを前もって抱くようになった。いまや彼はズザンナに、彼は結婚しても婚約してもいないが、彼とレーンヒェンとは黙っていても、自分たちはお互いにお互いのものなのだというをいつも分かり合えたのだ、とも打ち明けた。こう聞いてもズザンナの振る舞いに変わりは見られないようであり、そのことはゴルノウに彼女への信頼を生じさせた。シュテッティンに到着すると、彼はヴィーガントに出会わないかどうか誇らしげに通りを隅々まで見渡し、すぐにレーンヒェンのところにズザンナも連れて行った。ひょっとすると、彼は思いやりの友というのでもなく、むしろすべてを体よく自分の説明に引き入れてしまおうと、ずっと躍起になっていたのである。

ゴルノウが染物師のところでは、レーンヒェンは、ゴルノウが彼女を最後に見た食堂からそう遠くないところにある郊外の庭にいるということだった。彼はまず宿屋へ行って部屋を二つ取ってから、ズザンナと共に橋を渡って行った。彼女は、連なる丘の斜面をぐるりと埋めている街の眺めに少なからず驚いていたし、同様に、ゴルノウはどんな宝物を自分に異国の地で紹介してくれるのだろうか、と好奇心にかられて川向うへ目をやったり、どんな羊飼いの女、あるいは庭師の女がその宝物に熱いまなざしを向けているのか、と草地の方を見たりした。そこで彼らが見たのは、庭の前へ集まる大勢の若い女たちだった。彼女たちは、様々な種類の野菜が入った大きなかごを街へ運んでいるところだった。野菜は、彼女たちの頬が爽やかな心によって輝くように、大地の新鮮な力によって輝いていた。この女たちは一人の青白い美しい人を歌いながら取り囲んでいたが、ゴルノウはすでに遠くからそれこそが彼のレーンヒェンであると気づいていた。彼女はふらついていたので、女たちは彼女のかごを持ってやった。そして彼女はさらに、自分には今日のうちにまだ何か切迫したものがあるようだ、と皆に予言した。ゴルノウは喜びつつも、他の女性たちがいることで邪魔されたように感じていたので、少し不器用に道に立ちほだかり、そして言った。「こんにちは、レーネ。元気でやっていたかい、君はちょっと青白く見えるけど、いまは足りないものなんてないだろう。」同じくらい当惑しているレーネは、答えた。「ごきげんよう、もうもどってきたのね。なんだか四旬節の断食のあとってわけじゃなさそうじゃない。頭の上に何て道化みみたいな帽子をのせているの、『おごれるもの久しからず』って言うでしょう。今日は全くいい調子じゃあないわ、胸がととても重苦しいのよ。」—「おや、レーンヒェン、でも病気にはならないよ、」ゴルノウは答えた。「僕の髪かざりは君を病気にはしないはずさ。これはオランダ風の流行なんだ。見ていてよ、僕はいまこの悪魔を水に投げ入れるから。こいつには僕らを分かっことなんてできないよ。」—「何てこと、イエス様、」レーネは叫んだ。「この人は何をしているのでしょうか、それだってお金がかかったものでしょうに。本当の賢

することはできないし、それなら私は彼を独り占めしようとは思わない。もうこんな話で時間を無駄にすることはしないのよ。私達には、考えなくちゃならないもっと大切なことがあるわ。もし私がこのキャベツを家に持って入らなかつたら、主人のヴィーガントは何も食べるものが手に入らなくて、また騒ぎ立てるのよ。」—「ああ、その主人とかいうヴィーガントを聖なる雷が…」—「呪ってはだめよ、」レーネは言った。「彼は極めて上品にも、誠実にだってなるのだから。私達、もう気が合わないのね。せめて、私に私の仕事をさせてちょうだい。そしてあなたのお父様のところへ行ってごらんなさい。彼は今、ツィーグラースのそばの街中に住んでいるわ。そしてあなたに、あなたの状況がどうなっているか全て話してくれるでしょう。」

ズザンナを宿へ連れて行ったあと、彼は急いで父のもとへ行つた。彼の頭は、彼が貧しくて気にもかけられないような存在だったときには彼と一緒にになりたい女性が二人もいたのに、裕福で尊敬される人物になったがために、今やもう彼を受け入れたいという女の子がいなくなってしまった、という物思いでいっぱいだった。ゴルノウは、のんびりと夕食の席についている父親を見つけたのだが、彼はすっかり変わってしまっていて、知らない人のようだった。老人は息子の金で住まいを上等に調べ、レーンヒェン宛の手紙は読んだけれども、渡さずじまいであった。息子が彼を非難すると、父親は誇らしげに、お前はシュヴァーベン人であつてヴェンド人ではないので、自分の出生には何の後ろめたさも負つてはいない、だから、あの非嫡出の娘と関わり合つてはならない、と言つた。「ああ、お父さん、」ゴルノウは言つた。「オランダとドイツ国内では、シュヴァーベン人は、ここにおけるヴェンド人よりもずっと評判が悪いということを知っているんですか。」—「そんなことは悩むに足らん。」父親は言つた。「そして気にすることもないではないか、私達にとってはどうでもよいことであるはずなのだから。だが、私の目が黒い限りは、お前が非嫡出の娘なんぞと結婚しないように呪いをかけ続けるだろうよ。」—老人にはいとまごいの会釈をする価値もなかつた。ゴルノウは絶望して彼のもとを去つた。ただ、この老人はいわば貴族の一人としてみなされていたので、自分の染色業を發展させる許可を彼から得たのは喜びであつた。

翌日に全てのことが決定した。レーネとズザンナは大変うちとけあつたので、どちらも互いからもう離れようとは思わなかつた。二人共ゴルノウの家事をきりもりしたがつたが、互いに傷つけあわないために、彼と結婚しようとはしなかつた。けれども彼女たちは、ゴルノウに、妻として末の妹シャルロッテを提案した。彼女については、田舎でどれほど美しく成長したのかということや、ゴルノウに対してひどく人見知りしていたので一度も話しかけたことはないことなど、ズザンナが多くを話していたのである。レーネはその日のうちに自分の主人の許可をもって仕事から解放された。ヴィーガントは、もしゴルノウを見つけたらその場で殺してやる、と声高に脅迫していたので、投獄されたのである。

数日後にゴルノウはレーネとズザンナを連れてベルリンに帰つた。この二人の娘は彼の家を調べた。そこでゴルノウはもう一度、一人の説教師を通してレーネに結婚の許しを求めた。しかし彼女はこう言つた。「妹という信頼できる人を見つけてから、私には結婚したい

という願望がない。私は、自分の人生の最も大切な試みを、かつてあらゆる試みのうちに感じたような内面の使命感なしに始めたくはないの。」そこでゴルノウは、ズザンナが自分との結婚を承諾するよう、レーネに頼んでもらった。彼女は、心からの善意と、切実な説得でもって頼んだけれども、ズザンナはこう答えた。「私のあなたへの愛は愚かさであったと感じています。これは私の心の内奥には馴染みのないものでした。あなたはこの愚かさを私の中に引き起こさないよう用心したいでしょうし、末の妹シャルロッテと結婚するようというレーネの助言に従うのが良いと思います。あの子は、キリスト教の教えに従った結婚をして、誰しにも手を差し伸べ、あの子のやさしさと従順さでもって万人をきっと幸せにするでしょうから。」

ゴルノウはこの提案に決して耳を貸そうとしなかった。彼は熱心に働いたが、心の内では一度も本当の幸せを感じることはなかった。彼は、たった一人でこの世界で生きるように自分は作られてはいないと感じた。しかし、レーネとズザンナの振る舞いに宿るようになった真剣さと厳しさが、彼らの付き合いからゴルノウに対するあらゆる親密な性質を消し去ってしまってからというもの、自分にとって誰にもまして特別に愛しい存在となるかもしれない女性を知ることもなかった。そうして彼においては、単調で喜びのない活動のうちに二年が過ぎて行った。

ゴルノウは、もしかすると自分は、自分の運を試すため、すっかり貧しい状態で、再び見知らぬ土地へ行ってしまうかのような欲求にしばしば駆られたが、それを苦勞して思いとどまってきた。しかし三度目の春の太陽が巡ってきて、雪がとけ、大地の緑が再び外へとせり出し、木々のつぼみが大地の心をほころばせ、秘密のチンキ剤が世界を全てすっかりと変えたときのことである。彼は裕福であったにも関わらず、小さな旅行にさえ滅多に車を使わなかったので、あるとき商売のためボツダムへと歩いて行った。彼は立ち並ぶベルリンの塔を見回して、頭を振り、目に浮かぶ涙を拭いて、こう考えつつ先へ進んだ。「自分がこの景色を目にすることは二度とないだろう、神がそう思し召しならば！」彼の決心は一瞬でうまれた。再び貧しくなって、しかし自由に自分の幸せを探し出そう。自分の富は、遠方からあの二人の娘と父親に譲ろう。ゴルノウは彼らに全てを心底快く分け与えた。そして見知らぬ土地で、今では強制の多い関係の中でもはや同一人物と認めることはできなくなってしまったけれども、かつて一人の貧しい若者としてシュテットェンで心から深く愛したかの人のような、もう一人のレーンヒェンに再び会おうと望んだ。

この望みによって彼はかつてないほど浮かされて、ハーフェル川の岸辺の道に座り込んだ。その広がった水面は、ほとんどシュテットェン沿いのオーデル川のような力強い大河に比肩した。ゴルノウは、あたかも自分が再びそこにおいて、自分が経験してきたことが全てただの夢であったかのように、そしてヴィーガントが殴り合いのときに木にぶつけて加えた一撃のせいで、自分がいまだに意識不明の状態にあるかのように思った。そこで彼はついに目が覚めたと思った。そして隣で涙に溺れる彼のレーネを見つけた。彼女は、もしあなたが元気になったらすぐに結婚したいと思っている、あなたは染物師のままでもいいし、もし

人々があなたをヴェンド人として追放するようなことがあれば、農業で生計を立てても良い、と固く誓っていた。そして彼女は彼に優しくキスをした。急に、彼女は今まで見たことがない程若々しく、やさしく、美しく見えた。ただ厄介だったことに、彼女は彼の痛々しい頭の傷を気かけず、彼を激しく膝の上で揺さぶったので、ゴルノウは最後には痛みあまり叫び声をあげたのである。――

この痛みと叫び声で、ゴルノウは道端で自分を襲ったこの実際の夢から目覚めた。彼は初め頭へ手を伸ばそうとした。しかし同時に、自分が車に乗せられているのを知った。彼は跳び上がろうとしたが、力が入らないので体を動かすことができず、最初に発した言葉は不明瞭であった。自分をのぞき込むレーネの頭が見えたが、彼が夢の中で見たレーネと同じくらい、非常に美しかった。それは愛情たっぷりに彼を見守る神の摂理のようであった。ゴルノウは自らの幸運を思いながら彼女に身を任せ、再びひきつったような眠りへと落ちて行った。やっと目覚めたとき、彼は自分の家のベッドの中において、血管が一本開かれているところだった。医者が隣に立っており、ゴルノウに病状について尋ねた。しかしゴルノウは、三年前のけんかで頭を木の幹に打ち付けられた部分に痛みを感じたのだ、と答えることしかできなかった。医者はその箇所が炎症を起こしていると診断し、必要な薬を処方した。そして、ゴルノウが尋ねたのに対し、彼はポツダムへの道で通りすがりの人たちに死人のように思われて、かつぎ上げられて街へ運ばれたのだ、と伝えた。「ああ、」患者は溜息をついた。「それじゃあ僕が見た美しい少女は、僕を腕に抱えて運び去ろうとする死の天使だったというわけか。僕は永遠にその天使のもとで暮らしたい、それに比べればこの世は何と貧しいことか！」――医者は彼が何を言っているのかわからなかった。そのとき見知らぬ少女がこちらへ近づいてきた。それを見たゴルノウは叫んだ。「ああ、いらっしやい、僕の死の天使！」そして再び病的な眠りへと落ちていった。彼は眠りながら度々うわごとを言い、ときおり目を覚ましてその見知らぬ少女がレーネとズザンナの間立っているのを見ると、何度もこう叫んだ。「その死の天使をひきとめないでくれ、その子は僕のところに來たいんだから。」

一週間後、彼の頭部の炎症はかなり収まった。その見知らぬ少女は、それまで彼の前に姿を現さないように用心していた。ついに彼女が思い切って彼のベッドに近寄ったとき、彼は再び大きな喜びでもって、僕の死の天使、と呼んだ。そしてズザンナに、彼女の目にもベッドの脇にいるその姿が見えるのかと尋ねた。ズザンナは泣いて聞き返した。「どうしてあなたは、私の妹シャルロッテに、そんなに驚くのですか。彼女は全身全霊をかけてあなたの命のために祈り、愛を込めてあなたを街へ連れて帰ってきたというのに。」レーネは彼のところに近寄り、こう尋ねた。「それじゃあ今の時まで、あなたは私が病床で何度も話したことを聞いていなかったのですか。ある予感に追われるまま、どうやってこの愛らしい一番下の異母妹が、私に会わせてほしい、そしてゴルノウを愛に満ちた若さによって慰めたい、と父親に密かに要求したのか、そういうこと一切を。」ゴルノウは頭を振った。彼は衰弱しているせいで、小さなシャルロッテが短期間でこんなにも大きく変わったこと、一人のほつそ

りした子供から、美しく立派な少女になったらしいということを理解できなかった。彼は、この再会が彼女にそんなにも多くの苦勞と苦しみを与えたことで、恥じ入っているようだった。その間にも、死の天使という考えが、再び彼を徐々に眠りへと誘う夢のように、あるいは逆に、眠りから夢へと沈んでいくかのように、常にちらついていた。

さらに一週間後、おそらく医者之力もあつたのだが、彼の力強い体質は、もはやどんな強迫観念も彼の魂をゆさぶることができないほど病気を克服した。そこで彼は身を起こし、祈った。「父なる神よ、私はあなたの寵愛から逃れようともがいていたとき、私の悲しみはあなたのご好意に非難を投げかけました。その報いとして、あなたは私をこの脆い体の支配の下へとお連れになります。そしてあなたは、克服できない恐怖によって、私が自分自身に寄せている信頼を、あなたに依存していることの自覚へとお導きになります。どうか私の心に光をお与えください、お言葉とご助言をお与えください！」

彼がそう祈っていたとき、レーネが聖書を持って部屋へと入ってきた。彼女は日々そこから何か彼に音読して聞かせるのが常であつた。彼女は、敬虔な考えによってもたらされる偶然の贈り物に当然のように確かな意味を仮定していたので、慣れた手つきで偶然に従って本を開き、モーゼの第一卷第三十章を読んだ。「ラケルは、ヤコブとの間に子どもができないことがわかると、姉をねたむようになり、ヤコブに向かって、『わたしにもぜひ子どもを与えてください。与えてくださらなければ、私は死にます。』と言った。ヤコブは激しく怒って、言った、『私が神に代われると言うのか。お前の胎に子どもを宿らせないのは神御自身なのだ。』ラケルは、『私の召し使いのビルハがいます。彼女のところに入ってください。彼女が子どもを産み、私がその子を膝の上に迎えれば、彼女によって私も子どもを持つことができます』と言った。ラケルはヤコブに召し使いビルハを側女として与えたので、ヤコブは彼女のところに入った。」ⁱ

レーネがこの言葉を読みながら、特別に真面目な様子で身を起こしたゴルノウを気にしているあいだに、シャルロッセが美しいダイヤモンドの指輪を持って、喜び勇んで部屋へと入ってきた。その指輪は、王様が彼の染色工場事業への褒美として、あるいはもしかすると同時に病氣の見舞いとして、侍従を通じて渡させたものだった。ゴルノウはこの侍従がいるのを忘れてしまつて、言い表せないような喜びの中、まるで回復期の患者が花盛りの庭や熟した果物を見つめるときのように、シャルロッセの穏やかな顔を見つめた。そして彼はシャルロッセの指の一本をとり、指輪をはめて言った。「私の命があるのはあなたのおかげです。あなたは私の生の天使だったのですね。私を思い出す縁として、この指輪を受け取ってください。これは私があなたにあげられるもののうち、最も愛しいものなのです！」—この言葉と共にシャルロッセは涙を流しながら彼の首に抱きついた。レーネは聖書をさらに読み続けた。「やがて、ビルハは身ごもつてヤコブとの間に男の子を産んだ。そのときラケルは、『私の訴えを神は正しくお裁きになり、私の願いを聞き入れ男の子を与えてくださった』と言った。」ⁱⁱゴルノウは言った。「私達の結婚、これは神のご意思なのでしょうか。」シャルロッセがちょうど答えようとしたとき、誰一人として侵入に気が付かなかつた四人目がすぐ

近くにて、彼女を驚かした。その人はあつという間にゴルノウとシャルロッテの手を重ね合わせ、叫んだ。「神はお前たちの契り、子孫を祝福なさる！ 婚礼には私も招待せねばならないぞ！」—

ゴルノウは跳び上がった。彼は手を引っ込めようとしたのだが、声ですぐに王様だと気付いたその来客は、その手をむんずと掴んでいた。ゴルノウは王の上着にキスをしようとした。王はそれを許さず言った。「万事よかろう、六週間後の徴兵検査の後が婚礼だ。それならば全てよいであろう。お前は勇敢な男であり、私にとっては何人もの貴族より大切だ。さあ座りなさい、まだ病み上がりだろうから。お前には再び健康を取り戻してほしいのだ。そうでなければお前の工場は悪魔の手に落ちてしまうかもしれない。さあ座りなさい、そしてオランダのパイプを持って来させなさい。わが将軍がもうすぐ階段を上がって来るだろう、今日はここで煙草のサロンを開くのだから。ほら、さっさと座りなさい、君と話すことがたくさんあるのだ。」—

レーネとシャルロッテは、椅子と机を調べようと急いだ。しかしゴルノウは、彼の豪華なタイル張りの大型キッチンに炭火を起し、パイプと煙草を用意するように頼んだ。王様はそれに賛成してうなずき、言った。「オランダにいたという者はすなわち、よくできた奴よ。分をわかまえており、全てがあるべきところにある。」

染物師が道を案内し、王様が彼を率いた。ゴルノウは心中、たとえ王様がシャルロッテと婚約しても、彼女の意思は変わらないかどうか話し合うために抜け出そう、レーネとズザンナは数え切れないくらいこの結婚を勧めてくれてはいたけれども、本心からこの結婚に同意できるのかどうか、彼女らの良心に問うてみよう、と急いでいた。だが、それを実行するには彼の王様に対する尊敬の念は大きすぎた。けれどもこの三人の乙女たちはみな、徐々にやって来る将校たちの世話で忙しくなって、もはや姿を見せることはできず、ビールやパイプ、煙草は一人の見習いに運ばせていた。つまり可哀想なゴルノウには、彼女たちの目からその気持ちを読み取るという慰めも欠けていたのである。ゴルノウはまた、自分の持っている全ての蚕をグントリンク^{III}に贈った王様に、絹の工場を作るようにと言われて苦しんだ。ゴルノウには絹についての何の知識もなかったのである。可哀想な苦しめる者よ！ たとえ他の者が宮廷で数年を過ごしたとしても、それはゴルノウが過ごしたこの数時間ほど煩わしいものではなかっただろう。王様が家来を連れて帰っていった時には、もう夕方になっていた。ゴルノウは自室に戻った。彼は今までよりも未来に対して一層の不安を抱えるようになっていた。なぜならこの病は彼が闘った初めての病であり、彼の意識を何度も打ち負かしたからである。明るいところから暗いところへ入ったとき、彼にはまったく何も見えなかった。彼は、三姉妹が彼を抱きしめてキスしたときまで、この三人がどれだけ彼の近くに立っているか、気づかなかったのである。しかし、何の言葉も発せられなかったこのわずかな間が、自分の幸運がこの三人の誠実な心の内にしっかりと根付いているのだと納得するには十分だった。

まず初めにズザンナが口を開き、飾りつけのために、何を縫ったり刺繍したりするつもり

か話した。レーネはそれに同調した。ゴルノウは内心ひどく驚きながら大声で言った。「ねえ、シャルロッテ、教えておくれ、どうして僕は君をアムステルダムではあんなにも完全に無視することができたんだい。今や僕には君を見るため以外の目はないというのに。君も当時僕と同様、僕に惹かれることはなかったのかい？」—「いいえ、ゴルノウ。」彼女は言った。「私があなたを見るたびにいつも感じていた恥ずかしさを言い表すことはできません。そして、身を隠す度にどんな苦しみを、どんな悲しみを抱いていたのかも。」—「あなたに言いたくはなかったのだけれど、」ズザンナは口を開いた。「実は彼女の存在こそが、あなたへの好意が私をあつた時あんなにも愚かにした原因になったのよ。年齢のおかげで、私には見たところ妹よりもあなたに近づく権利があるようだったし、私の愚かな意思をそのままにしておくのも全く正当なことだと信じていたわ。だってあなたは、それまでお洋服やおもちゃのことはばかり考えていた子供にまで、そのような愛を魔法のように芽生えさせたのですもの。シャルロッテの方でも、早熟過ぎる愛との戦いによって弱々しくなり、混乱させられてしまって、自分を全く見失ってしまった。お父様はこの子が正気を失ってしまうのではないかと心配して、寄宿学校へやったのよ。」—「それは奇妙な時間だったわ。」シャルロッテは言った。「私は急激に成長したから、私の服は一つも丈が合わなくなってしまった。私の考えもそれと同じように変わっていったわ。私は自分を放っておかないことを心得ていたし、寄宿学校で自由な時間を以前よりも多く得られたのは私にとって幸運だったわ。その時間で私は、外の空気を吸いながらぶらぶらしたり、自分の好きなように、あなたのことを考えたり、あるいは何も考えなかったりした。そんなふうを考えるうちに私はますます成長して、ある日家から出かけて森の入り口までやって来たの。そこで一軒の粗末な家の前で立ち止まったのだけれど、その家は木造で、かなりこざっぱりとしていたわ。その階段を何段か降りると、芝でできたベンチを見つけたわ。私は涼もうと思ってその上に横になったの。すると私の横にモグラが掘ったような穴があつて、そこから様々な声が響いてきたわ。だから私はうずうずしてその音をはっきりと聞けるところに耳を押し当てたの。その下では何かの生き物の集団と一緒に座って、話し合っていたわ。彼らの歩き方から、その姿は概ね人間のようだろうと推論できた。そして、そのうちの一人がこう言ったの。私の後をこっそりつけてやろう。こいつは頭で何を考えているのか自分自身でも全くわかっていないらしいから、面白いじゃないか、って。でも先日、庭でのこと、彼は私の下に穴を掘って埋まっていたのだけれど、私は不意に切り花のとがった先っぽを地面へ落としてしまって、彼の頬を傷つけてしまったの。するともう一人の誰かが言ったわ。こいつが私の髪を自分のハーブの上に引っ張って、それを弦にして弾きながら、私に色んな奇妙なことを考えさせたから、私はすっかり忘れっぽくなって、こいつが大変厚かましくもしばしば隣にいたのを忘れていたんだよ、って。それで三人目が言ったの。そろそろ嬉しいことが起こるだろう、というの私に来てほしいという知らせが、ゴルノウ、あなたからやってくるだろうから、私があなたと結婚するのがいいってお姉様が望んでいるから、って。—これを聞いたとき、枯れた苔にかび臭く覆われていると思われた私の心からその苔がはがれたようだった。でも一方で、この虫たち

は心の健康な樹皮を食い破ろうとしてきた。私はさらに、一人目が机をたたいてこう叫ぶのを聞いたわ。『俺はゴルノウに地面から毒を焚いてやるつもりだ、彼の死のせいだ彼女がそいつに再会するように！』—

「この言葉は私を驚かしたわ。私は立ち上がってその場所を正確に覚え、一本の木に十字の印をつけて急いで帰った。家では寄宿学校が手配した女性の説教師が、私が帰ってこないのをひどく心配していたわ。彼女は私にあらゆることを尋ねた。私が全て話し終わると、彼女は冷静に、それは鉱山ですでにしばしば目撃されている地下の生き物でしょう、と言ったわ。彼女は親切にも、翌日その森まで一緒に行ってくれた。私はすぐにその木に気が付いたのだけど、本当に奇妙なことにあの十字は死んだ芋虫でうめつくされていて、まるで赤く塗られているみたいだった。私達が例の家へ着くと、説教師はこの家は畑の番人のものだったわ。ベンチは変わらずそこにあったけど、モグラの穴は見えなくなっていて、私がそれを前日には確かに見たところには、大きなキノコが生えていた。説教師はその鮮やかな色から、猛毒だと見抜いたわ。ああ考えてちょうだい、ゴルノウ、私が三か月後にあなたのもとへと旅したとき、もしかすると死んだあなたを見るかもしれないと考えるたびに、いつも怯えてあたりを見回していたことを、そして今度は本当に死人のように道に横たわるあなたを見たときのことを！」—ゴルノウは尋ねた。「でも君だってすぐには僕だと気が付かなかったんじゃないのかい？」—「もちろん、すぐに気づいたわ。」シャルロッテは答えた。「なぜかはわからないけれど、私はあなたを道端で見つけるにちがいないということが、念頭にいつも浮かんでいたのよ。遠く離れたところからでもあなただって気付いたわ。だって私はずっと、近づいてくる人はみんなあなただと思っていたんですもの。」—「どうして、僕がこれほどまでの神の愛に値するということのだろう。」ゴルノウはため息をついた。「考えておくれ、僕は神のおきてに背いてあれほどにも孤独に生きていて、君たちにも同じような孤独を感じさせるきっかけをつくってしまった。そうして悲嘆にくれたせいで、天の施しから逃げ切って、再び貧乏になって自分の満足を探そうとしたんだ。それで病に襲われた。今や僕は信頼できる人間になったんだ、僕が道を外れようとするときには、この頭の高傷が警告してくれるんだから。ああ、誰もがこういう警告を与える痛みを持っていたら！　そして僕がこの幸運に値するありがたさといったら！」レーネはここで、彼がまだシュテッティンで彼女の規律と指導のもとで働いていたときに、彼と普段話していたのと同じような声音で言った。「あなたが幸運に値するのは、あなたが幸運に感わされず、自分を見失わずにいるからよ。あなたはその幸運に敬意を払い、感謝しているけれども、それよりも自分自身と、良心や勤勉さ、自分の手でやり遂げて勝ち取ったものをもっと尊重しているからよ。この世であなたに欠けるものは何もないでしょう。私は、あなたではなく、あなたの将来の子供達のために、今日という婚約の日にこの幸運のお金を贈ろうと思います。このお金は、誠実な人の手にはずっと残るけれど、悪癖のある人の手からは水のように零れ落ちてしまうでしょう。」—ズザンナはこの美しい贈り物についてシャルロッテを幸せな気持ちで褒め称えた。ズザンナは、シャルロッテに贈られたハールツグルデンと、その上に彫られている男のうち聖ア

ンドレアスをじっと見た。そして、シャルロッテに同等の価値のあるものを贈ることができないのを残念に思うけれど、じつは密かに、ゴルノウの物語を二十四の小さな絵にして織り込んだ、ガラス製珊瑚のついた大きな布を持ってきたのだと言った。それは、彼らが財を築く基盤となった出来事を記念するものとして、子供やまたその子供へと、洗礼を行う際の毛布として相続できるようなものだった。ゴルノウはその繊細な手仕事に驚き、毛布の上で自分自身に何度も再会するたびに微笑んだ。シャルロッテは二人に愛情を込めて感謝したが、あどけなくこう言った。「お姉様たちが私の子供のことをとてもよく考えてくださったのは、少しおかしいわ。だって私自身まだ子供なんですもの。私は何で遊べばいいのかしら。」—「僕とだよ。」ゴルノウは言った。「僕は君と子供に戻るんだから。そしたら僕は自分のことももうわからなくなってしまう。」「ゴルノウ、ばかにはならないでちょうだいね！」とレーネは言った。

以上は、四週間後に盛大に執り行われた結婚式の序幕であった。

将来の義父となる説教師ヒレは、母と祖母からの無数の贈り物を携え、数日前にアムステルダムから到着した。彼女達が持っていた正確な日々の習慣はあらゆる旅行の妨げになっていたので、この二人はちょうど贈り物というかたちでのみ結婚式に居合わせられたのだ。可哀想なヒレは、レーネと再会して全てを説明する瞬間まで、死刑執行直前の最後の猶予期間を思い切って楽しむことができない哀れな罪人のようであった。しかしながら、確固として分別のある魂をもつレーネは、次のようにもっともな考えを述べて、すぐに彼を落ち着かせた。「あなたは私に嫡出子としての権利を確約するおつもりなのでしょうが、誠実な親族以外には誰も私が非嫡出の出自だとは知らされていないこの地では、それはむしろ有害になり得るでしょう。一方で、あなたはご自身の青年時代の過ちをすでに長すぎるほどの時間をかけて償ったのに、このような自白は、オランダでの有益な聖職者の集いから、あなたを締め出しかねないものなのではないでしょうか。」彼が、しかしあなたを他人として扱うことは、父の愛において不可能である、と口を挟むと、彼女はこう提案した。「私をあなたの死んだ兄弟の娘と称するのはどうでしょう。私は、娘の愛において、あなたに姪としてあらゆる場面で愛情をお返しすることができるでしょう。」—説教師は安堵した。

レーネには、高い分別と高慢などところのない性格が卓越していた。それを疑うような人も、レーネを目の前にすれば信じるしかなかった。父は彼女にキスし、相続分として莫大な資産を安全なオランダの手形を手渡した。レーネは感謝し、このお金は自由に使っても良いのかと尋ねた。父がそれを認めると、レーネは、この財産を孤児院を建てるための基金にする許可を求めた。そして、彼女が幼く貧しかったときにも捨て子として享受してきた神の摂理に対する感謝から、その施設を自分で運営したいと思っているのだと告げた。説教師は娘の敬虔さに喜び、計画が完成するまで助言を与えて彼女を助けた。レーネはすでに長い間ズザンナと話し合っただけで計画は立てていたのだが、まだ費用の計算にすら至っていなかった。しかし大抵の場合、良き心かけの主要な障害が見つかるのは、この費用の計算というものにおいてなのだ。ズザンナは共同考案者と呼ばれ、父がこの計画に賛成して支援してくれること

に生き生きと歓喜した。彼女は父の足元にひざまずき、頼んだ。「私の相続分も同様に、このキリストの教えに従った試みに使わせてください。私はもう決して結婚しない、そして私のレーネから決して離れはしない、と固く心に決めたのですから。レーネは、その賢明さによって、私を初めて本当の敬虔さというものに到らせてくれました。」当初、父は結婚しないという彼女の決断を諦めさせようとしたが、最終的には彼女の願いに譲歩せねばならなかった。父は、ふたりの財産と照らし合わせながら計画を実行し、婚礼の日に義理の息子に確認のためその内容を打ち明けた。今や病気から回復し、丈夫になって職人として世界を見るようになっていたゴルノウは、婚姻関係を結ぶという人生の幸せから身を引いたこの二人の女性が、品位があり、世界に必要とされる、永遠の救いをもたらす活動によって、彼に対する風変わりな愛の関係を満たし、またそれぞれの運命と完全に和解するための術を見つけたというこの最後の幸せを、感動なくして迎え入れることはできなかった。彼は喜びとともに毎年の相当な寄付金を約束して署名し、さらに、もしこの二人の創立者のうちの一方が、一生結婚はしないという決心を諦めたら、この施設のために使われた資本を彼女に払い戻すことも申し出た。

この話し合いが終わるやいなや、王様がやってきてこの創立を認め、そのためにシュプレ川沿いのケルン地区にある一軒のちょうどよい家を贈った。婚礼は花嫁の父によって大層感動的に執り行われた。花嫁の滑らかな髪に載せられた乙女の冠のために、シャルロッテは領主夫人さながらであった。そしてゴルノウは、まるで世界が自分のものであるかのように、辺りをしっかりと見回した。

ただ、参列していた花婿の父だけが、自分の簡素な黒い服に満足していなかった。ゴルデナウの領主は、その地の名前と同様に金びかの衣装を身に付けるべきである、と言い張った。しかし息子は、この気高い出生地の名前をだれかが聞くことになる前に、「貴族が金を大抵服の飾りの組みひもなんぞにすり切らしてしまう一方で、手工業には金の土壌があって、金の平原を手に入れることができるんですよ。」と保証して彼をなだめた。そこで父親は、せめて男爵グントリンクをよく見ようとした。彼を連れてきたのは、王様と彼の敵ファスマン¹⁴だった。育ちに合わない男爵という地位によって、この博識な男はどれ程不幸になったことだろう。ゴルノウ老人は、ただ驚いて、人々がこの可哀想な悪魔に好き放題している様子を見た。彼は式の執行係長として、黒の折り返しのついた滑稽な赤いスカートをはかされ、頭の両側に分厚く垂れ下がっている、白いヤギの毛でできたかつらの下で汗をかいていた。彼はファスマンに侍従の鍵を盗まれたので、罰として金に塗られた長たらしい木製の鍵をぶらさげていた。祝宴の席上で、彼の本当の息子の到着が告げられた。説教師ヒレはその名前を聞いただけで赤面してしまっただが、グントリンクに似たようなかつらと鍵を身につけて、彼そっくりに着飾った一匹の猿が杖をついて入ってきたとき、どれほど皆は驚き、グントリンクはのしり声を上げたことか。グントリンクはこの獣を殺してしまいたかったが、王様の不興を買うわけにはいかなかったので、この猿を息子として認め、小さく元気な男にキスをするはめになった。その後、彼は酔いつぶされ、家まで這って帰っていった。皆が彼

に気を取られていたので、ゴルノウは誰にも邪魔されずに自分の若い妻をじっくりと見ることができた。

王様は立ち上がると、自分の役立たずの料理人のところでは、こんなにおいしいものは今まで食べたことがない、と断言した。ところがゴルノウが、ここで食事を供しましたのは、まさにその陛下の料理人たちでございませう、と言うと、王様は彼ら呼びつけ、日々の不手際を非難した。善良な人々はしかし、ずうずうしくも答えた。「この染物師の旦那のように、もし陛下が料理に必要なもの全てをお渡しくださるのなら、私たちも毎日同じように美味しいものをお作りしましょう。」それに対して王様は何が必要なのか全て数え上げさせたが、まだ半分のところで料理人たちを出口へ追いやり、言った。「そういうものは、わしのところへ持ってきてはならぬぞ。」

王様が立ち去ると、(これは昼食時の話であった) ゴルノウは外に集まっていた貧しい人々に料理を全て与えた。そして夕食には、自分の隣人や友人、職人たちを家庭料理でもてなさせて、「上流階級の食事では、あわや餓死してしまいそうだったよ」と言った。ただ、ゴルノウ老人は自室へ引きこもっていた。彼は三十年間貧しい日雇い労働者として小屋で生活していたのだが、そのなかで初めて降り注いだ幸運という光は、以前から彼の頭を占めていた蚊をたたき起こした。そうして、彼には世間で尊敬されている人は皆あまりにも悪い人々に思われるようになった。このように、持続的なものはただ教育によってのみ基礎づけられるということ、そして、教育との内面的な関係(これは外面的な教育の規則やシステムとは全く異なる)をもたない世界の変化はすべて、雲の影のように過ぎ去ってしまう、というものは真実なのである。

もう片方の親密な二人組はあまりにいつも一緒にいたので、「一人の男が結婚すると二人の女がついてくる」という格言が簡単に実証され得たかもしれない。二人の勇敢な男がレーネとズザンナに結婚を申し込んだが、「私達は、持て得る全ての魂と愛でもってこの孤児院を運営するために、決して結婚するつもりはないのです。」と断言して、二人共この申し込みを断った。確かにこの決心は人々を不思議がらせるものだったが、それにはいくつかの莫大な貢献によって寄付を増やすという効果もあった。あるとき、プロテスタントの領主たちは修道院を没収しているけれども、少なくとも修道院の表向き目的である教育や看病、勉学は、違うやり方で公的に確立するべきで、その義務を領主たちは負っているのではないか、ということについて極めて真剣な話し合いが行われた。しかし、アカデミーの責任者であった男爵グントリンクが泣きながら部屋に入ってきたとき、いったい誰がこの話し合いを続けることができたのだろうか。彼の口から披露される博識ぶりを見るのは恐ろしい光景だった。彼はこう報告した。「王様が私の部屋を壁でふさがせてしまったために、私は一時間あまりもドアを探しているふりをしなければならなかったのです。実のところ、ドアのありかにはすぐに気が付いていたのですが、ただ王様が自分の様子を眺めて楽しんでいただけで、そうするほかなかったのです。」ゴルノウは、「どうせ酔いつぶれたせいで寝過ごしたんじゃないですか。」と尋ねた。可哀想な男は、自分の魂にかけて言った。「私は生まれた

ての赤ん坊のように正気でした。ただ、宮廷の人々に乾杯の杯で殺されてしまわないように、あたかも酔っぱらっているかのようにふるまわねばならなかったのです。今私は、友人として、ゴルノウ、あなたに絹工場をつくることを思いとどまるよう説得しに来たのです。そしてワインを一杯やりながら、私が今蚕のせいで被っている苦しみを、お話ししようと来たのです。」みなは彼を気の毒に思った。彼は続けた。「ああ、私があなた方という善良な人々の何を羨んでいるかといったら、あなた方が、青春時代に数年の辛い修業時代を経て、手に職をもつ人物へと立派に成長したことです。私は長い間、早朝から深夜まで本に埋もれて勉学に励んできました。しかしそれは最終的に、王様のもて、宮廷道化師としての私に差し出される、あの一切れの酸っぱいパンを稼ぐためのものだったのです。親愛なる人々よ、私の助けとなるのは、多くの貧しく困っている人々が私に相談し、そして私が彼らを助けることができる、ということなのです。王宮の粗野な人々は、あるときは私を圧殺する熊をけしかけて私の肉体を追わせ、またあるときは私の肉を食い破る凶暴な豚を私にけしかけます。そんな状況で、いったい誰が私を助けることなどできるでしょうか。—それどころか、国中の蚕を全て保護しなければならない今このときに。」—「なんということだろう、」ゴルノウは言った。「僕なら物乞いをして日々のパンを得る方がましだ！」—「言うのは簡単なのです。」グントリンクは言った。「私は一度逃げ出しました。すると、王宮の人々は騎兵を動員して私を連れ帰りました。それでも私は、正直者のアイゼンプレーザーのように巡査の厳しい監視下に置かれなかったことを喜ばねばなりませんでした。」—「私もあのアイゼンプレーザーのように、絶望して首を吊るべきでしょうか。」少しの空白の後、グントリンクは尋ねた。—「神は我が侍従どのお守りくださいます。」説教師は答えた。「忍耐は悪魔を食い破るのです。」—「忍耐はバラを手折るでしょう！」*ゴルノウは言って、集まった人々の歓声を受けながら、シャルロッテと二人でこっそり出て行った。—「最も大きな幸せは忍耐です。」グントリンクは言った。「もし私に幸せがあったとしたら、忍耐も欠けてはいなかったはずです。ですが私には幸せも忍耐も欠けているのです、だからワインを注いでください。各々は自分自身のために、神は我々みんなのために。神は、空高く成長するのを木々に禁じていらっしゃる。鳥は空高く飛べるけれども、巣をつくるには木の枝がなければならぬ。若い夫婦の健康に乾杯、万歳！」—続いて、十時を告げるパロキアル教会の塔の歌時計が鳴った。「高みにいる神のみに栄光あれ。神の栄光は、天の青空の上で草を食む家畜の群れのように、明るい鐘の音で、静かな空気を突き通って遠くまで響く。みなは、あたかもそれを初めて聞くかのように、聞き耳をたてる。—その時代はそれほど単純であり、それほどわずかなもので満ち足りていた、誰の口からも発せられない無限に多くのものを確信しつつ。」

翌朝、ゴルノウが朝早くに起き、二日目、三日目にもやってきた結婚式の招待客たちを受け入れるために家を調べていたときのことだった。彼は食事部屋で、クッションのついた椅子で眠っている、というよりちょうど目を覚まそうとしているグントリンクを見つけた。グントリンクは彼に朝の挨拶をし、とても良く眠り、たくさん夢を見たと言った。それから、「やるべきことが終わったら、染物の実験場へ私と一緒に行って欲しいのです。」と頼んだ。

「私には、あなたに打ち明けるべきことがあります。寝ている間にお告げを受けたことを、あなたに知らせなければなりません。」ゴルノウは、この奇妙な男が大変真面目な様子で話したので、好奇心を掻き立てられた。彼は急いで仕事を終わらせ、グントリンクの願いに応じて実験場へ連れて行った。グントリンクは扉に鍵を掛け、ゴルノウに尋ねた。「赤いライオンと哲学的アダムの循環についてはよくご存知ですか。」ゴルノウは驚いて彼を見つめた。ゴルノウには、彼がそこから何を言わんとするのかわからなかった。「万物溶解液についてもご存知ありませんか。」グントリンクはもっと驚いて尋ねた。「あなたはおそらく、ご自分が金を作るのだと私に白状したくないのでしょうか。ですが、私がこう言えば、信頼してください。私はある小瓶をもっているのです、それはカバンの中にあります。その小瓶には、少なくとも三千万ポンドの銀を金に変えることができる、大変強力なチンキ剤が入っています。」—ゴルノウは、錬金術のことはすでに何度も聞いており、同時代の人々と同じように信じてはいたが、この奇跡の知恵にこれほどまでに近づいたことはいまだかつてなかった。彼はこのことを「朝の贈り物」^{モルゲンガベ}のように、この奇妙な出来事を感嘆して見つめるべきなのだろうと思った。今や、彼はグントリンクに正直に言った。「私はあなたのわざに疑いの念を抱いています。そんなに大きな価値のあるものをカバンに入れてお持ちなのだとしたら、なぜあなたは、得られた酸っぱいパンに不平を言うはめになるのでしょうか。」グントリンクは言った。「親愛なる友よ、私の道化帽は、どんなに強い鉄兜よりも私の頭をよく守ってくれるのです。今国を治めている領主が、私が錬金術師であることを知れば、私に彼自身のために働くよう強いることでしょ。しかし、それは我々のわざの内的な本性に従えば、許されていないことなのです。私が苦勞して作りあげたチンキ剤を与えられるのは、自分の力でもチンキ剤を作り得たであろう人、つまりゴルノウ、あなたのような人々にだけなのです。巷の噂では、あなたの富は錬金術のお陰で築かれたようですが、それは本当ではないですよ。ええ、キリストに誓って。」ゴルノウは言った。「私は金を作り出そうと試みたことは一度もありません。ただ、そのような類の試みを見ることに関しては、心底興味がそそられるように思います。」—「そういうことでしたら、これが早い方法でしょう。私に銀をください。ただし、純粋な銀に限りますよ。火はちょうど燃えはじめたし、るつぼも用意してあります。まあ、このようなものを見たということは、あなたにとっては奇妙なこととして残るでしょうね。もしこれがうまくいかなければ、私はこの自前のナイフで自害しましょう。」そしてグントリンクはナイフを机の上に置いた。

ゴルノウは好奇心のせいで夢中になった。彼は自室へ走って行ったが、そこには結婚式のために購入された新しい燭台と塩入れの他に純粋な銀はなかった。これらは当時、芸術作品として敬意を払われ、相続されていたものだったので、ゴルノウはこれらを使うことをためらった。彼は部屋中をぐるりと周り、箱の中でいくつかのシャツのボタンを探した。そして、百枚のハールツグルデンに行き着いた。彼のレーネが保証したところによると、この硬貨は純粋な銀であるはずであった。将来の子供へのこの宝を、自分の婚礼の日にも何倍にも増やすことができるということが、彼をどれ程喜ばせたのだろうか。子供たちが成人するまでに、こ

の資本は利子によって増やさなくてもよいのだ！—彼は袋を抱えて大急ぎで実験場へと走って行った。途中でお祝いを言って引き留めようとしたレーネには、ちょっと返事をしただけだった。

グントリンクはその間に用意を全て調べていた。炎は燃え、るつぼは赤く熱せられていた。彼はハールツグルデンをよく観察し、それを指輪にはめていた黒い石にさつと擦らせると、驚いて言った。「この銀は、これ以上純化することはできないから、自然のものではないだろう。この実験にはなおさらふさわしい。」この言葉と共に、彼は銀貨をるつぼへ投げ込んだ。そしてすぐに、シャツの下のベルトから、栓のねじ込まれているきれいに磨かれた小瓶を抜き取り、光にかざして言った。「全世界に対して戦争をするための富は、ここにある。だから、こいつが名もない者の手にあることは許されないのだ。」そして彼は栓を抜き、木でできた楊枝を一本小瓶に入れ、赤く染めて引き抜いた。「見るのです、ゴルノウ、これがチンキ剤です、これぞ染色業の極み！」—グントリンクは、さらにこの粉の大部分を小瓶の口で擦り落としてから、ほとんど赤には見えなくなった楊枝をるつぼに投げ入れた。あたかも何か完全にとけてしまったかのように、すぐにもすごい火の粉がるつぼの中に巻きあがった。グントリンクは言った。「こいつは多すぎたようだ。燃えがらの中には、倍の実験をするのに十分なだけのチンキ剤が見つかるだろう。」少ししてから、彼はるつぼを空にして、ゴルノウに金を一粒、隣人の金細工師シュテッフエンのところに持っていくよう頼んだ。

ゴルノウは大急ぎで言われた通りにし、金細工師に、「これはオランダから持ってきた東インドの未加工の金なのだが、これが純粋なものかどうか判断してほしい。」と言った。金細工師は、今までこれほど純粋な金は扱ったことがない、と断言した。ゴルノウは非常に驚いて、この知らせを錬金術師のもとに持ち帰った。グントリンクはそれに対して微笑み、言った。「私はあなたを愛していますし、再びどこかで働きたいとも思っています。ですから、この小瓶をあなたに結婚式のモルゲンガーベとして贈っても、お礼は言わないでください。あなたは私を愚か者だと考えていらっしやいましたが、それを後悔なさることでしょう。私のことを思い、これを必要としてください。しかし、私に感謝はしないでください。じきに二度とお会いすることはなくなるんですから。」—

こう言うと、彼は驚いている染物師のもとを大急ぎで立ち去った。染物師は、一言も発することができなかった。なぜなら、彼が世界の中で見つけたあらゆる幸せ、自分の仕事が積み上げてきたあらゆるものが、この幸運の嵐を前にして、まるで一滴の雫のように消えてしまったからである。

この混乱の中、レーネは彼を見つけた。彼女はその場に散らばっている金を見て、そのうちの一つにハールツグルデンの刻印を見つけ、悲し気に尋ねた。「あなたは子供のための宝物をどう管理していたの。天のお母様からの贈り物を、どう扱ったの。」—彼は嘘がつけず、夜に徘徊していた者が、道中でどう幽霊に出会ったのか、その驚くべき出来事を話して聞かせた。「僕は王国を買おうとした、僕の子供達が統治するはずだった。全てあの一人の男の

うちでうごめいていたんだ、何がって、国という国のお金を呪われた欲望によって台無しにしてしまったもの全てが。」

そこでレーネは何をしたかって？—レーネは、かつて彼が修行中の若者であったとき、善いことをしなさいと注意していたときのように真剣に彼を見つめ、彼女お決まりの文句を言った。「ゴルノウ、ばかにはならないでちょうだい！」それから一言も続けることなく、まるでユダヤ人が手を組んで金の子牛をあがめるように小瓶を握っているゴルノウからその小瓶を取り上げ、開いている窓から横を流れるシュプレー川へと投げ捨てた。—ゴルノウの顔は荒々しく歪み、彼の手は無意識のうちに、グントリンクが机の上に置いていったナイフを掴んだ。それを自分自身に向けているのか、あるいはレーネに向けているのか、彼にはわからなかった。—しかしその刃はナイフから地面へと抜け落ちた。ゴルノウは頭部に激しい痛みを感じ、レーネの前にひざまずいた。彼は、彼の魂が救われたことを彼女に感謝して、さらにあの人工の魅惑的な金を川の中へ投げ捨てるよう懇願した。—「いいえ、」レーネは真剣な様子で答えたが、そこに厳しさはなかった。「私ではなく、神に感謝するのです。それから、この金は持つておくのです。ただあなたには必要ありません。この警告とともに、あなたの子供たちに持たせてください。人間は、彼の現世における最高の幸福の渦中にいるとき、自分を信用しきくことはまかりならぬ。反対に、最もすべきであることは、現世におけるその力を自分の意思の下で抑制できるよう、神に祈ることである。」—

「私を、幸福の中にひとりぼっちで置いて行かないでください。」と、ズザンナと入ってきたシャルロッテは言った。レーネとゴルノウは彼女達を抱きしめた。そして、あらゆることが、尽きることのない愛の幸のうちに与えられ、忘れられたのであった。

訳注

ⁱ 新共同訳参照。http://www.bible.or.jp/read/vers_search.html (2019年2月8日閲覧)。

ⁱⁱ 同上。

ⁱⁱⁱ Jakob Paul Freiherr von Gundling (1673-1731)。歴史家、ベルリンのリッター・アカデミーの教授。フリードリヒ・ヴィルヘルム一世によって貴族に叙せられた。

^{iv} David Faßmann (1683-1744)。グントリンクの常なる敵対者。

^v ことわざ「忍耐はバラをもたらす」の言葉遊び。

^{vi} 初夜の翌朝に新郎が新婦に贈るもの。